

2010 年度萌芽的プロジェクト研究 B4 「占領開拓期文化研究会」 研究報告
〈占領・開拓期〉の記録と表現：文学および映像表現を中心に

〈占領と開拓〉の問題系 ——「占領開拓期文化研究会」活動・成果報告——

内藤由直

本特集は、2010 年度国際言語文化研究所プロジェクト B4 「占領開拓期文化研究会」の活動内容を報告するとともに、プロジェクトを通して構想・執筆された諸論考を掲載するものである。

占領開拓期文化研究会は、1920 年代から 60 年代までを幅広く「占領と開拓の時代」と捉え、文学作品や映像フィルムの分析を通して、その時代に生きた人々の経験や記憶、感情の表現を現在に呼び起こす目的で結成された。

本研究会は、2010 年度の活動期間中、計 4 回の研究会を開催した。ここでは教員、ポスドク、大学院生、学外研究者を交えた研究発表・議論の場が形成され、占領と開拓に関する多様な問題について時間を忘れるほど熱心に討議を行った。また、埋もれたままになっていた映像フィルムの資料調査や、学外での情報発信なども積極的に行い、大学のキャンパスを越えた広範な研究活動を行った。その詳細は、以下に掲げる通りである。

研究会活動

[第 1 回研究会] 2010 年 7 月 29 日（木）15:00～18:00（参加者 12 名）

於・立命館大学衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室

（協議）今後の活動方針について

（報告）雨宮幸明「花やしき所蔵フィルム調査報告—『山宣渡政労農葬』の修復経緯について—」

[第 2 回研究会] 2010 年 9 月 25 日（土）14:00～19:30（参加者 14 名）

於・立命館大学衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室

（研究発表）内藤由直「野間宏の〈国民文学〉論——その抵抗と革命の論理——」

（研究発表）村田裕和「貴司山治の占領開拓期文学について」

（研究発表）伊藤純「貴司日記に見る「小林多喜二全集」の形成過程——“書誌”の背後に広がる世界」

[第 3 回研究会] 2010 年 12 月 4 日（土）15:00～18:00（参加者 13 名）

於・立命館大学衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室

（研究発表）鳥木圭太「『混血』という表象——佐多稲子「分身」をよむ」

(研究発表) 和田崇「権力と向き合う日本人——中野重治「おどる男」論——」

[第4回研究会] 2011年2月26日(土) 13:00～17:00(参加者18名)

於・ラポール京都(京都労働者総合会館)第2会議室

(研究発表) 友田義行「闖入する民主主義——戦後占領と安部公房——」

(研究発表) 雨宮幸明「能勢克男の小型映画『疏水 流れに沿って——』の背景」

[研究会風景]



学会発表

[1] 雨宮幸明「プロキノ映画『山宣渡政労農葬』における映像編集に関する考察——京都花やしき所蔵フィルムをてがかりに——」(2010年度日本近代文学会関西支部秋季大会 2010年11月6日 於・奈良教育大学)

[2] 池田啓悟「『雑沓』系列の射程——宮本百合子「雑沓」「海流」「道づれ」をめぐって——」(昭和文学会第47回研究会 2010年12月11日 於・お茶の水女子大学)

[3] 鳥木圭太「動揺する語り手の位相——佐多稲子「分身」をよむ」(昭和文学会第47回研究会 2010年12月11日 於・お茶の水女子大学)

学術論文

[1] 内藤由直「野間宏の抵抗と革命——戦後国民文学論の同時代性——」(『社会文学』日本社会文学会 第33号 pp.59-70 2011年2月)

[2] 鳥木圭太「感情と階級意識について——中野重治の福本イズム継承をめぐって」(『梨の花通信』中野重治の会 第59号 pp.6-10 2011年6月)

以下に掲載する各論文は、上記の研究会や学外での学会発表を元にして成稿されたもの、あるいは研究会活動に触発されて新たに稿を起こしたものである。そのいずれもが、〈占領と開拓〉の問題系を、各論者それぞれの研究領域から、より深く追究した内容となっている。

なお、「占領開拓期文化研究会」は、2011年度も国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究として採択され、プロジェクトB2(代表:友田義行, 副代表:村田裕和)として活動を継続している。研究会の開催情報等は、「占領開拓期文化研究会ブログ」(URL <http://senryokaitakukibunka>.)

〈占領と開拓〉の問題系（内藤）

blog.fc2.com/) で広く公開している。今後の研究会活動にも注目して頂きたい。

最後に、占領開拓期文化研究会の活動を支えてくれた立命館大学人文社会リサーチオフィスの宇治橋奈名子さんと村上夏樹さんに感謝申し上げます。本研究会が滞りなく活動できたのは、両氏の優れた事務能力によるご支援があったからである。2011年の春に、お二人はともに本学を退職されたが、この研究報告が宇治橋さんと村上さんにとって、立命館大学に勤務された記念の一つとなれば幸甚である。

